

ペスタロッターにおける個人と社会

——18世紀スイスにおける共同体再編成の課題——

東北大学教育学部 鈴木 由美子

1. はじめに

ペスタロッターの時代におけるスイスは、ホブズボームのいう「二重革命（産業革命と市民革命）」の時代であった⁽¹⁾。約100年の間隔をおいて二つの革命を達成したイギリスを除き、ヨーロッパ諸国は二重革命の進行するなかで近代化への道を模索した。スイスも例外ではない。

スイスにおける二重革命の衝撃をもっとも端的にしめしているのは、ヘルヴェーチア政府の興亡（1798～1803年）である。フランスの北イタリア政策の一貫として、スイスの中央集権化が必要とされ、フランス軍と封建勢力の拮抗をめざすスイスの革命勢力とによって、1798年、革命政権であるヘルヴェーチア政府が樹立された。ヘルヴェーチア政府は憲法第4条において、「公的な福祉のふたつの基礎、それは安寧と啓蒙である」と規定し、国民教育を強化した⁽²⁾。文部大臣シュタップァーは、国家的課題として教育改革にとりくむことになる。

こうした国民教育への関心は、政治的側面だけではない。スイスの近代化を推進した勢力は、階級的には中産階層であった。ヘルヴェーチア政府は、中産階層を構成する手工業、小売業ならびに農業従事者の妥協の産物であり、政治的にはブルジョア的合理主義を徹底することができなかった。しかしヘルヴェーチア政府崩壊後のスイスは、マニユファクチャーから機械制工業へと経済基盤を発展させ、それにともなって中産階層は中産階級、労働者階級ならびに農民階級に分化していく⁽³⁾。ペスタロッターはもともと中産階層に改革の主体をみだしていた。ところが経済的不安定は、中産階層を変動させ、中産階層それ自体が資本家となりかつ労働者となった⁽⁴⁾。18世紀から19世紀にかけてのスイスは、こうした急激な経済構造の変動のため、労働者教

育の場としての家庭の意味を弱めた。とくに農村における農民の分化は、もはや家庭では労働者教育を担いえないことを示している⁽⁵⁾。そのために公教育の整備が急務とされた。

ところでフィヒテによって絶賛され、ヨーロッパに反響をよんだ小説『リーन्हルトとゲルトルート』が出版されたのは、このように公的な労働者教育機関の設置が必要とされていたときであった。それゆえ「居間の教育(Wohnstübenerziehung)」のもつ感化力によって、国家の浄化を求めるペスタロッチーの思考形式は、時代に逆行するものであるかのように見える。ペスタロッチー研究者のこの点に関する見解は、次の二点に要約される。まず第一にペスタロッチーはあくまで家庭を重視し、学校(公教育)を必要悪と考えたという見解⁽⁶⁾、第二に、ペスタロッチーは居間の教育の理念が時代遅れであると認識し、晩年には家庭重視の考えを改めたとの見解である⁽⁷⁾。ここでペスタロッチーにおける家庭教育論をみると、彼は一方でゲルトルートに体现される良妻賢母的な母親による家庭教育を賛美しながら、他方で生活の困窮のために働かざるをえない母親たちのために、就学前教育施設であるキンダーハウスを設立することを重視している⁽⁸⁾。そのためペスタロッチーにおける家庭教育論は、家庭教育論と学校(公)教育論との二側面をもっているかのように思われる。こうした家庭教育論の二面性を、スイスにおける階級構成との関連でみると、もともと中産階層を対象にしていたペスタロッチーの家庭教育論が、中産階層の分化にしたがって、狭義での中産階級を対象にした家庭教育論と、労働者階級を対象にした家庭教育論に分化していることに気づく。ペスタロッチーにおける家庭教育論の二面性には、こうした階級観が反映されているのである。ここから次のことが明らかになる。すなわち第一に、ペスタロッチーは家庭教育と学校教育との連続性を認めており、両者は相互補完的な役割をもつものと認識されている点、第二に学校教育は家庭教育の延長線上におかれ、その意味で、家庭教育、とくに母親と子どもとの関係が教育の基礎と位置づけられている点である。つまり家庭教育論は、学校(公)教育論との対比においてその本質が問われているのではなく、むしろ近代化の過程のなかで必要とされた教育作用そのものの意味を示していると思われる。実際ペスタロッチーは『リーन्हルトとゲルトルート』のな

かで、単純な教育立国論ではなく、教育による経済的人間の育成と、そうした経済的人間による国家政策についての理論を展開している⁽⁹⁾。つまりペスタロッチーにおいては、教育・経済・政治は密接不可分なのである。

ところでペスタロッチー研究者であるシュプリンガーは、政治的経済的変動がペスタロッチーの思索の根本であり、しかもとりわけ「不安な、しかし将来性ゆたかな〈工業〉という現象」がその中心であることを指摘しながら、そうした全体像から教育思想を切り離すことによって、ペスタロッチーの思考形式をとりだそうと試みる⁽¹⁰⁾。こうした観点から抽出されたペスタロッチーの思考形式における様々な矛盾は、ペスタロッチー自身の内的矛盾として理解されてきた。それに対し批判的理論の立場にたつラングは、政治観をペスタロッチーの思索のあらゆる発展と変化との基礎におくことによって、内的な統一を試みた⁽¹¹⁾。こうしてペスタロッチー研究はすでに新しい局面をむかえている。グドーンズの指摘どおり、〈永遠なる真理〉ではなく、ペスタロッチーの著作を、ペスタロッチーが生きた時代の経済的、社会的および政治的現実のなかで理解する試みが要求される⁽¹²⁾。

シュプリンガー (S. Springer) は、校訂版全集の公刊によって新たに公表された『幼児教育の書簡』や『わが時代とわが祖国の純真・誠意ならびに高潔な精神に訴える』にもとづいた研究の必要性を指摘しているが⁽¹³⁾、ここでとくに注目したいのは、個と集団との問題である。『わが時代とわが祖国の純真・誠意ならびに高潔な精神に訴える』のなかで、ペスタロッチーは個と集団についての見解を、もっとも明確かつ対立的に展開している。とはいえ、ペスタロッチーにおける個と社会との問題は、個人の道徳的自立の強調と集団の徹底的批判として、単純に構成されているわけではない。なるほどペスタロッチーは、個人の道徳的自立を高く評価している。しかし同時に彼は、個人と社会の間の分裂を深く自覚している。それゆえ人間は、「いのちがけの跳躍 (salt mortale)」をとおして、再生されねばならないのである⁽¹⁴⁾。ここでとくに問題となるのは、「環境教育学 (Milieupädagogik)」という概念である。シュプリンガーは、『探究』をひとつの分岐点として、ペスタロッチーの思想を二分し、生活圏の再建によって人間性の回復を志向する環境教育学を前期思想の特徴とし、自力 (Selbstkraft)、自己活動 (Selbst-

tätigkeit)、自己配慮 (Selbstsorge) の教育学 (自律教育学) の勝利をもって、後期思想の特徴とした¹⁴⁾。しかし「環境教育学」ということばはペスタロッチーのものではなく、しかもペスタロッチーの理論の背後にあるものとの関連を吟味することなく用いられてきたため、ペスタロッチーの思索をあまりにも単純化しすぎているように思われる¹⁵⁾。実際シュプランガー自身も、この両面がペスタロッチーの思索に混在していることを認めている¹⁶⁾。とすれば、むしろこの混在にこそ、ペスタロッチーの思索の原点をみるべきではないであろうか。そこで本稿の目的は、「環境教育学」とよばれる前期思想が「自律教育学」とよばれる後期思想へと転換する重要な著作であるとされる『探究』を、ペスタロッチーの政治的経済的思索との関連から再吟味し、この両者の混在それ自体のもつ社会的意味を検証することにある。そのためにまず第一に、ペスタロッチーの歴史的課題を政治的経済的側面から明らかにし、第二に、そうした課題意識とペスタロッチーの思索との接点をペスタロッチーの著作と歴史的現実のなかで検証していくことにする。

2. スイスにおける階級構成の変化と母性への注目

フランス革命 (1789年) に象徴されるように、封建制の打破と、契約による市民社会の樹立を推進した中産階級の自由主義イデオロギーはまず、個人を、束縛している足かせから解放することを主要目的とし、理論的公式化を試みたが、同時に現実に樹立された諸国家の衝撃をうけ、そのイデオロギーは崩壊した¹⁷⁾。急進的中産階級のイデオロギーは、アダム・スミスのいう自由競争の原理の貫徹を支持するものと、現実に生じた自由競争の問題点に注目し、それを克服する原理である分配の原理へと向かうものとに分裂しつつあった¹⁸⁾。こうした急進的中産階級のあいだにあって、しかも現実的に重要な役割を果たした中産階級がある。ホブズボームによればこうした中間的位置にあったイデオロギーの担い手は、急進的小所有者たち (リトル・メン) と貴族的君主制社会のわくぐみのなかの中産階級とである¹⁹⁾。前者のもっとも重要な思想家はルソーである。ルソーは純粋な個人主義と、人間は共同社会のなかでのみ人間であるという確信とのあいだの矛盾を提起した。後者を代表するのは、いわゆるドイツ観念論に属する思想家たちである。なかでも

ヘーゲルは、ブルジョア的傾向をもつと同時に、「旧体制のあけすけな完成²¹⁾」であるドイツ国家を肯定するという矛盾した立場にあった。ここでルソーを継承するペスタロッチーと、ドイツ観念論の完成者であるとされるヘーゲルとの、個人と集団との関係に関する見解をみることは興味深いことである。

まずヘーゲルについてしてみると、彼は出発点に集団（すなわち共同体）をおき、「それが歴史的発展の衝撃をうけて、個々人に分解しているのだとみる²²⁾」。ヘーゲルによれば「家族—市民社会—国家の発展は、概念の発展順序であって、概念の形態化の歴史的な発展は国家が最初²³⁾」である。「国家は倫理的理念の現実態」であり、「よい国家の公民たることにおいてはじめて個人は、おのれの権利を得る²⁴⁾」。それに対しペスタロッチーは出発点に個人をおく。ペスタロッチーにおいては、国家は歴史的所産である。彼にとって「社会は、本質的に、教育によって人間に、さらに市民に形成された個人の総和であり結合である²⁵⁾」。それゆえ国家は、成員たる個人の質によって規定される。ヘーゲルにとっては、家族、社会ならびに国家が問題であるが、ペスタロッチーにとってはそれを支える人間自身が問題なのである。そこでペスタロッチーは、ルソーが提起した問題、すなわち純粹な個人主義と、人間は共同社会のなかでのみ人間であるという確信とのあいだの矛盾の解決を、自己の課題とすることになる。ペスタロッチーは、「真理は一面的ではない。自由は善であるが、従順も同様に善である。わたしたちはルソーが分離したものを結合しなければならない²⁶⁾」とし、ルソーが提起した問題を、より原則的に捉える。ペスタロッチーにおける自由と従順の関係は、一方ではルソーの強い影響を示しながら、他方ではルソーにおける人間と市民との間の二者択一性を克服するものである²⁷⁾。このことは同時に現存するブルジョア社会、ブルジョア国家を否定することを意味する。ルソーが提出した問題への回答は、単なる教育方法論の問題ではなく、新たな人間観の創出と共同体への志向を含むのである。そのためペスタロッチーの回答は、第一にルソーの矛盾を克服する人間観を、社会を構成する原理的個人として提示することによって、第二にそうした個人によって構成される社会（共同体）を提示することによって示される。これらの問題に対し、ペスタロッチーはまず個人と社会との関係について次のような認識を示す。

(1) 弁証法的人間観

すでに『隠者の夕暮』において示唆されているように、ペスタロッチーの問題意識は、人間が向上しようとするにもかかわらず凋落していくその源泉を追求し、向上のための手段を人間に与えることにあった²⁸。『探究』におけるペスタロッチーの革命的なテーゼ、「わたしは環境が人間をつくるということを知った。だが同時にわたしは人間が環境をつくるということ、人間は自分の意志にしたがって環境をさまざまに統御する一種の力を自分自身のうちにもっているということを知った²⁹」は、この問題に対するペスタロッチーの態度を端的に示している。ペスタロッチーにとって問題は時代だけではなく、時代を形成する人間自身でもある。そこで彼は、時代を批判すると同時に、時代を形成する人間をも批判することによって問題に深く迫るのである。

ペスタロッチーは、社会を自然状態、社会状態ならびに道德状態の三状態として理解する。まず自然状態は、ルソーと異なり、二段階設定される。誕生直後のまったく無邪気な状態はすぐ失われ、墮落した自然人として生きる状態が自然状態の第二段階としておかれる。そのため社会状態は、自然状態を法や権利によって改善した状態として提示される。しかし、社会状態は本質的に「万人の万人に対する闘争状態の継続³⁰」である。もちろん社会的人間が、アトム的な個人として市民社会に生きることも可能である。しかしペスタロッチーは、無政府主義への批判とともに、より高次の段階として、道德状態を設定する。ペスタロッチーは道德を、第一に宗教のもつ道德的作用と、第二に国家のもつ道德的作用と区別する。これら両者の否定とともに、ペスタロッチーは独自の道德観を表明する。「わたしの人格にまったく固有な義務動機だけが、純粹に道德的である³¹」。さらに「わたしはただわたし自身によってのみ、わたしに固有な力によってのみ、道德的となりうる³²」というペスタロッチーのことは、個人を改革する主体としての個人への着目を示している。改革の主体はもはや宗教でも国家でもない。人間自身にあるのである。

自然法思想を根底におくペスタロッチーにとって、こうした社会観を貫く基本的なメルクマールは、人間における唯一の自然的欲求としての自己保存

の欲求である³³。自然状態にある人間は、自己保存にとって危険であるあらゆるものに反抗する。こうした状態が、危険を排除しうる社会的戒律を求める。しかしまた社会的戒律が自己保存にとって妨げとなるなら、人間は社会的戒律をふたたび否定する。こうして自己保存の貫徹はベスタロッチーの社会観を貫くメルクマールとして設定される。その意味では、自然状態と道德状態は、自己保存を貫徹する絶対的状态として、社会状態は自然状態の相対的状态として理解される。しかし絶対的状态である道德状態は、相対的状态である社会状態の経験をとおしてのみ、絶対的状态として認識される。それゆえ社会状態は相対的であると同時に必然的である。人間は自然状態から、自己保存を貫徹するために社会状態にはいる。のこる問題は社会状態においていかにして自己保存を貫徹するかである。社会状態にある人間は、「動物的無邪気と道德的純粹さのなかにあつて、迷える墮落した中間的存在(Mittelding)としてあらわれる³⁴」。中間的存在としての人間は、ふたとりの方法によってみずからを改革しうる。第一に、完全なる「奇形化(Verstümmelung)」による市民の形成、第二に道德的状态への向上である。

まず第一点についていうと、ベスタロッチーは人間を市民にする唯一の方法として、完全なる奇形化をあげる。しかもそれは道德的自然の法則にしたがつた奇形ではなく、動物的自然の法則にしたがつた完全なる奇形化でなくてはならない。これによって、「人間は自然状態の喜びを知らないままに市民生活のくびきのなかにはいっていき、自分の錯覚に満足する。そして人間は知ることもなく享受したこともない自然状態にかわる満足な代償物を、市民生活のすべてのわずらわしさのただなかにつくりだすことができ、また失った自然状態とその魅力とをいつまでも思い起こして心を痛めたり不幸を感じたりすることなしに、社会状態の陶冶力とそのすべての長所とを享受することができる³⁵」。社会状態において人間は奇形化されることなしに存在することはできない。しかしまた同時に、人間は社会状態のなかで、自己を完成し、満足を得ることもできない。たとえ完全なる奇形化によって、社会状態の矛盾を認識せずにすむとしても、これはひとつの欺瞞にすぎないのである。人間は社会状態のなかで、ふたつの選択肢をもつ。すなわち完全な奇形化によって人間性をうしなうか、あるいは自然をうしなわせたすべてのもの

を確認したうえで道徳的状態へと高まるか、である。そこで第二点についてであるが、ペスタロッチーによれば、人間は自然の力によってのみ、道徳的状态に高まることができる。彼によれば、「社会的権利が世界にあらわれる以前からわたしの心の奥底に君臨していたわたしの自然の根本諸力は、社会的秩序から生じたすべての結果によってふたたびわたしの心の奥底において強められ、どん底にまで動物的に墮落したように見えるわたしを助け起こして、わたしの墮落からふたたび自ら立ち上がる力をわたしに得させる³⁶⁾」。こうして道徳的状态は自然状態の高次の段階として設定されるが、また同時に、自然的諸力は、社会的状態を通してのみ、道徳的状态へと高まる力となりうる。それゆえ道徳的状态は、自然状態の自己保存の欲求の貫徹された状態であると同時に、社会状態を相対化した状態である。したがって道徳状態に生きる人間は、一方では自然的であり、他方では社会的である³⁷⁾と規定できよう。こうした具体的な弁証法的人間観への到達が、ルソーが提起した問題に対するペスタロッチーのひとつの回答である。

ところで、前述したようにペスタロッチーは、近代資本主義の発展によって変更を余儀なくされた近代化の理念を、現実の政治的経済的体制のなかで検討し、新たな人間像と共同体像を提出することを、歴史的課題として負っていた。それゆえわたしたちは、自己の発達を貫徹した人間によって構成される社会（共同体）をも視野にいれねばならない。

(2) 共同体を結合する原理としての愛

まずペスタロッチーの集団観であるが、ペスタロッチーは集団を表現する群集 (Masse)、集団 (Kollektiv) および社会 (Gesellschaft) ということばを決していい意味で用いない。というのもペスタロッチーは個人に対し、集団の概念をおき、集団に「文明の墮落」の責任を負わせるからである³⁸⁾。それゆえペスタロッチーにおける集団批判は、同時に文明批判でもある。ペスタロッチーの集団批判は、第一に集団的存在としての個人に、第二に集団的組織である国家に向けられる。第一の点についていうと、ペスタロッチーはまず人間を、「個人的存在 (Individualexistenz)」としての人間と「集団的存在 (kollektive Existenz)」としての人間とに分類する³⁹⁾。ペスタロッチーによれば、個人的存在の人間は、本質的に独立的である。個人的存在の

人間は、自己の良心の力によって、自己自身で決定し、自己のなかで安らう。人間的に陶冶され、感覚的本性の我欲から独立した個人的存在としての人間は、また他人の自由をも尊敬する。このように「道徳的に自律した、集団的存在の社会的隷属から解放された人間は、同時に政治的に自律した存在である」⁴⁰。それに対し集団的存在としての人間は、本質的に従属的かつ他律的な人間である。集団的存在としての人間は、社会に従属的であり、他人を支配するよう駆り立てられる。このような絶対的他律性によって規定される人間を、ペスタロッチーは嫌悪した。なぜなら集団的存在としての人間は、群集を形成し、文明の墮落をもたらすからである。ペスタロッチーによれば、もっとも重要な集団的組織は国家である。

彼によれば、「国家には動物的な暴力へ向かう傾向がある。いや、国家が利己的であらざるをえないことは国家の本質にもとづいている。なぜなら国家の目的はけっして醇化ではなく、保障だからである。個人と社会とのいかなる衝突の際にも、国家は個人的存在に逆らって集団的存在を支持せざるをえない⁴¹」。ペスタロッチーは組織としての国家と、社会状態である市民社会とを区別する。社会状態における個人は、自然の要求をもつ人間であると同時に社会的義務を背負う人間である。ペスタロッチーにとって、国家の成員、すなわち公民 (Staatsbürger) は、国家内では、自己の権利によって、自己の権利を支持する法律によって存在せねばならない。人間は社会状態において、自然権の行使による自由を有すると同時に、社会的義務による自然権の自由の行使の制限を受ける。社会的義務は、人間が本来的に社会に依存的であることからの当然の帰結である。社会的義務の質を決定するのは憲法である。しかし最高の法的形式である憲法さえも、それが自由の精神と自由の感覚で満たされている時のみ、市民に自由を保証する。ペスタロッチーにとって肝要なのは、けっして一定の統治形態ではなく、むしろそれを担っている国民の精神である。ペスタロッチーはここで、盟約時代のスイスを想起する⁴²。1291年の原三州の独立によって成立したスイスは、自由と独立を基調とした共和国であった。ペスタロッチーは社会的人間によって、盟約時代のスイスの再興を意図したのである。しかもそれは単なる再興ではない。ペスタロッチーは盟約時代のスイスの自由と独立へのあこがれを念頭におきなが

ら、近代的な法治国家の樹立を意識している⁴³⁾。ペスタロッチーによれば、「スイス同盟の統一を可能にするのは、愛情、団結、親密で暖かく、一般的な、相互的な兄弟感覚だけである⁴⁴⁾」。つまりペスタロッチーはここでふたたび、近代的法治国家樹立以前の民衆結合の原理をとりあげるのである。国家の統一、すなわちスイス憲法のもっとも望ましい形態でさえ、集団的存在の問題にすぎない。しかし和合、いかえれば、自分たちの自主的な決定にもとづく責任ある個人の結合は、真の自由のもっともたしかな保障である⁴⁵⁾。ペスタロッチーは、「すべての正義が愛にもとづいているように、自由も愛にもとづいている」し、法律の範囲内でのみ、法律にしたがってのみ、統治することを求めるグランベールを批判している⁴⁶⁾。個人と個人とを結合するのは、いまや権利ではなく、人間的な愛なのである。「わたしが書くであろうすべてのものの序曲⁴⁷⁾」と位置づけられる『隠者の夕暮』においてすでにペスタロッチーは、封建的秩序や契約による人間結合を克服する論理としての愛を提示している。このテーマは、終始一貫変わらない。そしてこの愛の原理をもっとも端的に示しているのが、母親と子どもとの関係なのである。したがって、晩年において家庭教育を重視するペスタロッチーの教育思想は、決して家父長制イデオロギーの再興ではない。そうではなくてそれは、新しい共同体に生きる個人を結合する論理なのである。

3. 愛の発達法則と母親への注目

こうした二点からの問題意識は、発達論のなかに集約される。ペスタロッチーは人間の教育は二重の基礎、すなわち「第一は、人間が野辺のあらゆる動物と共通にもっている感性的なものから、第二は一段高い人間特有の本質、すなわち地上のあらゆる存在から人間を区別する本質から⁴⁸⁾」出発すると考える。ここには、「低級な動物的本性と高級な神的本性とのあいだの二元論的な区別⁴⁹⁾」はなく、むしろ、「感性的なものから道徳性への連続的なみちすじ⁵⁰⁾」が示される。ペスタロッチーによれば、人間的本性の原初的表現は、愛と信頼のしるしである乳幼児の微笑みである。これは人間の社会的欲求の最初の現れといってよいが、これを育成するのは乳幼児の自己保存の欲求の満足に関わる母親の行為である⁵¹⁾。「信仰と愛の資質は、…自然から養分を吸収して成長しなければならない⁵²⁾」。この自然とは、乳児の本能的欲求の満足

にかかわる一連の法則のことである。ペスタロッチーによれば、母親はわが子を育み、養い、守り、わが子の要求を満たし、無力な子どもを助ける。子どもは配慮され、喜び、そして愛、感謝、信頼の萌芽が芽生える。こうした相互作用のなかに、信仰と愛の資質を発展させる源泉がある。ペスタロッチーにとって、乳幼児の自己保存の欲求の満足は、すでに他者との関わりを含む社会的人間としての行為である⁶³。いいかえると人間は自然的欲求の満足を求める社会的存在である⁶⁴。このように、ペスタロッチーにおいては人間の本性は弁証法的である⁶⁵。それゆえ自己保存の貫徹と同胞愛の形成とは直結する。にもかかわらず利己心や欺瞞に満ちた、狡猾で残忍な人間が存在するのはなぜか。この問題にペスタロッチーは、〈悪〉を人間的本性の基本的要素から初り離すことによって答える。「『探究』に対し『純真者に訴える』においては、低級な動物的本性と高級な神的本性との間の人間本性の二元論的な区別が、より強調されている⁶⁶」のは、人間本性の二元論的把握のためではなく、むしろ一元的な発達論を提示するためなのである。

ペスタロッチーのこうした見解は、『ゲルトルート教育法』において明確である。ペスタロッチーは自己保存の貫徹と同胞愛との直結を発達の原則として示しながら、両者の分裂を引き起こす「世間」を批判する。ここで注目したいのは、「我欲 (Selbstsucht)」に関する見解である。ペスタロッチーは、我欲を人間的本性から分離している。我欲は「人間存在の〈自然〉ではなく、〈不自然 (Unnatur)〉かつ〈反自然 (Widernatur)〉に属する⁶⁷」。「〈不自然〉としての我欲は、ペスタロッチーにとってひとつの墮落現象、すなわち常に歴史のかつ社会的なカテゴリーとしての〈墮落〉である⁶⁸」。我欲は、人間的本性の感覚的・動物的な部分と直接に関連するものではなく、むしろ歴史的所産である。いいかえるとブルジョア的利害追求にのみ終始する政治や社会のもつ特質である。人間は、弁証法的存在であるがゆえに、発達のみちすじにおいて、歴史的所産である我欲へと墮落してゆく傾向性をもつが、我欲それ自体は決して人間的本性の基本的構成要素ではない。社会的人間の発達を貫徹するためには、我欲への墮落を阻止せねばならない。そのためにペスタロッチーは、発達論に自己克服 (Selbstüberwindung) の概念を導入する。

ルソーは一方で自己愛を、高度な人間理性の働きを媒介にして生まれるピエティエの感情によって自尊心へと変質させ、それによって人間の社会化を指向すると同時に、他方自己愛を、市民社会のなかで否定を媒介にして共同体への愛として再生することを通して、個人と共同体との分裂の止揚を意図したが、そのための人間性変革の課題はついに解決されなかった⁵⁹。それに対しペスタロッチーは、共同体を指向する個人を、原理的個人として基本に据えることによって、個人と社会との矛盾の止揚を意図する。ペスタロッチーの歴史的課題は所与の社会を越えた普遍的存在としての原理的個人にたちかえり、その発達法則を提示することにあった。そのポイントは自己克服力の育成にある。ペスタロッチーによれば、母親のもっとも重要な役割は自己克服力の育成にある⁶⁰。同時に乳幼児には自己の欲望をあきらめることの報いとして生じるであろう平安と愉悦の予感も存在する。ペスタロッチーによれば、「人間の本性をもっともはっきりと示す事実、他人の幸福のために自分の慰安や娯楽を犠牲にするという事実、個人の欲望をより高級な目的にしたがわせるという事実である⁶¹」。乳幼児にすでに備わっている自己克服力をめざめさせ活気づけるのは、母親である。母親が自己を犠牲にして子どもに献身するのは、母親が子どもを愛するからである。こうした母親の愛をうけて、子どもは母親と同様の愛を発達させる。ここでペスタロッチーは母性愛の機能を次の二点におく。それは第一に子どもの自己保存の達成であり、第二に子どもとの分離の達成である。子どもの自己保存の達成は、母性愛のもつ自然的機能であり、母子分離の達成は社会的機能である。母子分離の達成は、同時に子どもにおける自己克服力の形成を意味する。ここではとりわけ後者が重要である。ペスタロッチーによれば、子どもの自己保存を満足させる母親の行為のなかに、母子分離を達成する契機がある。子どもは自己保存の欲求を満足させるために母親の援助を待たねばならない。母親への信頼が忍耐力を育てる。両者の相互作用によって、自己克服力が育成される。このように母親によって育成される自己克服力は、外的な強制力によって注入されたものではないという点に大きな意味がある。そのために、母親という媒介があるにもかかわらず、自己克服力はそれ自体発達しうる人間に備わるひとつの能力として示される。

こうして社会的人間の発達法則として、第一に自己保存の貫徹と同胞愛との一致、第二にそのための自己克服力の覚醒が示される。ところで19世紀の産業革命はスイスにおいても婦人労働の性格を変え、家事労働とよばれる範囲に限定されていた婦人労働は、家庭外の労働へとその範囲を拡大した⁶²⁾。そのうえ18世紀のヨーロッパにおいては、母親による子どもの養育は一般的ではなく、母親の子どもに対する愛情も希薄であったといわれる⁶³⁾。こうしたなかで母親のもつ教育的機能を重視するペスタロッチーは、母親のもつ教育的機能と母親の属性とを厳密に区別することによって現実的課題へのアプローチを試みる。

ペスタロッチーに先立って教育における第一の役割を母親に与え、自然的特性として母性愛を賛美したのはルソーであったが⁶⁴⁾、ペスタロッチーは母性愛の概念に変更を加えている。ペスタロッチーにおいては、母性愛はもはや自然的特性であるだけではない。ペスタロッチーにおける原理的個人である社会的人間がもつ特性は、上記のように自然的であると同時に社会的である点にある。これらを同時に満たす最初の関係を、ペスタロッチーは母親と子どもとの関係にみる。母親と子どもとの関係は、最初の社会的関係である。両者を結合するのは、愛である。ここでペスタロッチーは、母親が一般的にわが子に対してもつ感情と、機能概念としての母性愛とを厳密に区別する。母親の愛情はそのままでは教育的ではない。それは、「聡明な愛(sehende Liebe)」、「思慮深い愛(a thinking love)」まで形成されてはじめて教育的機能をもつ。つまりペスタロッチーにおいては、母性愛はひとつの機能概念なのである。この意味で、母性愛は一般化される契機をももちうるのであり、それゆえペスタロッチーにおいては、先に述べた二面的な家庭教育論も、自己克服力の育成すなわち社会的人間の育成という課題に収斂されうるのである。

4. 新たな従属関係への転換

こうして抽出されてきた機能概念としての母性愛の現実的土台は、どこにあるのであろうか。一連の社会史的研究は、母性愛に関する概念が18世紀に始まることを指摘しているが、この観点は本稿にとって重要である。ルソー

の『エミール』によって主張され、はやりとなった母乳保育は、育児方法の転換だけでなく、また母親を中心とした、いいかえると母性愛を中心とした、愛によって結合された近代的個別家族の成立を示している⁶⁵。家族と母性愛との関連をみるうえで重要なのは、近代資本主義のエートスとしてのプロテスタンティズムの精神的影響である。宗教改革がもたらした「世俗内禁欲」は、神の栄光を称えるために、天職として世俗の職業に専心する禁欲的態度であるが、これは中産の生産者層と結合することによって、一方で専心した仕事が隣人愛のために貢献したかどうかを利潤で判断する目的合理的態度を形成し、他方で家父長制を強化する作用によって家族を生産の単位とする社会結合を強化した⁶⁶。ペスタロッチーが『ランゲントール講演』で高く評価しているように、スイスにおける近代資本主義の発展を支えたのは、「宗教改革の精神」であり、ペスタロッチーは、近代資本主義がもたらした人間解放的側面を認めるがゆえに、人間疎外の側面が露呈しつつある時代にあるにもかかわらず、「宗教改革の精神」の再興を求める⁶⁷。本稿にとってとくに重要なのは、家父長制を強化する作用である。禁欲的プロテスタンティズムのもつ家父長制を強化する作用は、女性に家事、育児を天職として自覚させるよう影響した⁶⁸。これはとくに中産階級における支配的イデオロギーとなり、良妻賢母的女性観を形成していく。しかし、近代的資本主義の発展は、農業から工業への産業構造の変化を促進し、労働者層においては経済基盤としての家庭の意義を弱める。近代的資本主義の発展は、まず父親の、続いて婦女子の家庭外労働を促進し、労働者階層における家父長制を現実的に崩壊させた。それゆえ母性愛の重視の現実的基盤は、階級分化を反映して、中産階級においては良妻賢母的なイデオロギーを形成し、労働者階級など母親が労働せざるをえない階層においては、むしろ良妻賢母的イデオロギーを基礎におきながらも、それを否定する存在となる就学前教育施設の構想へと突き進むのである。こうしてペスタロッチーは、家庭教育の政治的経済的意味を自覚するがゆえに、家庭教育を代替する施設を求めざるを得なくなるのである。

ところでわたしたちは、ペスタロッチーにおける家庭教育の両義性を、幼児教育史上の過渡期と捉え、そこにペスタロッチーの先見性をみるだけでよ

いであろうか⁶⁹。ペスタロッチーの家庭教育論における両義性は、18世紀から19世紀にかけてのスイスがかかえていた経済構造の変化にもとづく共同体の崩壊とその近代的再編成の課題のなかから生まれてきたものである。それゆえこの問題に対する回答を家庭教育、とくに母親の問題として提示するペスタロッチーの論理構造に、時代的課題の錯綜した構造をよみとることもできよう⁷⁰。

個人と社会との関係認識の始まりを乳児期にまでさかのぼることによって、ペスタロッチーは社会成立の必然性を認め、社会的存在としての人間を抽出した。このことは、最初的人間的結合としての母親と子どもとの交わりに社会的意味を与えることになった。ところで母性愛が個別的な意味において捉えられ、宗教・道徳教育との関連においてのみクローズ・アップされる場合には、母性は私事であり、個々の女性の自己教育が問題とされた。しかし母性が単なる私事ではなく、女子教育をとおして公教育としての性格をももちうるものと規定される場合には、母性の強調が国家権力と結合する危険性を内包することになる。それゆえペスタロッチーにおける家庭教育論の二面性はまた、封建的束縛から解放された個が、ふたたび近代的国家に再編成されていくその過程をも示している。その結果、人間はあらたな従属関係にはいることになる。

では封建的束縛から解放され、しかも近代的国家への吸収をも否定しうる絶対的個人を、ペスタロッチーはどのように規定したのであろうか。ペスタロッチーはここで愛の概念を導入する。人間と人間とを結合するのは、もはやキリスト的愛でも契約でもない。人間のたよりなさへの共感から生まれる愛である。ペスタロッチーは、この意味における愛の形成過程に母性愛を必要とする。このことは、主体的個人の形成過程への他律性の導入を意味する。母性愛の導入は、個人を他律的存在にせざるをえない。それゆえ個と社会との分裂の止揚は、より原則的な問題、つまり絶対的個人の発達過程における主体性の確立の問題となる。ペスタロッチーはそのために自立の原則としての自己克服を示しながら、それを「子どもから」主体的に構成することができなかった。これによって文化と自然との弁証法性が、むしろ教育的な問題として自覚的に示されたといえよう。

歴史のまがりかどにおいて常に話題となる人間形成の課題は、社会の発展と人間の発達との接点をめぐって提出される。自然と歴史との一致が人間解放の基本的条件であるにもかかわらず、依然わたしたちはそうした社会（共同体）を模索しているにすぎない。経済的發展による社会変動が急激さを増している今日、自然と歴史の一致を探る方向性は人類の存続に関わる問題となりつつある。

[注]

- (1) Hobsbawm ; The Age of Revolution, London, 1962, S. xv. (安川他訳『市民革命と産業革命』岩波書店, 1968年, Vページ)
- (2) Paul Kläui ; Freiheitsbriefe, Bundesbriefe Verkommnisse und Verfassungen, 1231—1815, 1963, Aarau, S. 49. 遠藤盛男著『スイス国民学校制度史研究』風間書房, 1987年, 25ページ.
- (3) Schweizer-Lexikon, Bd. 1, S. 194—196.
- (4) ストゥッキ著, 吉田訳『スイスの知恵』サイマル出版会, 1974年, 65ページ.
- (5) クループスカヤ著, 勝田訳『国民教育と民主主義』岩波書店, 1954年, 35ページ.
- (6) Ed. Spranger ; Pestalozzis Denkformen, Stuttgart, 1947, S. 80.
(吉本訳『ペスタロッチーの思考形式』明治図書, 1962年)
- (7) Pestalozzi ; Ausgewählte Werke, hrsg. von O. Boldemann, Volk und Wissen, 1965. Bd. 1, S. 53. Beiträge zur Geschichte der Vorschulerziehung, hrsg. von Bernstorff, u. s. w., Volk und Wissen, 1979, S. 113.
- (8) Vgl. Pestalozzi, Sämtliche Werke, hrsg. von Buchenau, u. s. w., Kritische Ausgabe, Berlin und Leipzig, 1927 ff (以下P. S. W.と略す), Bd. 5, S. 274, Bd. 6, S. 497—498.
- (9) Vgl. P. S. W., Bd. 3, S. 491—504. シュプラランガーは、ペスタロッチーは家庭における居間の教育作用を拡大することの必要性以外にも考えていなかった, と理解している。(Vgl. Ed. Spranger ; a. a. O., S. 40.)

- (10) Ed. Spranger ; a. a. O., S. 35.
- (11) A. Rang ; Der politische Pestalozzi, Frankfurt a. M., 1967, S. 9.
- (12) H. Gudjons ; Gesellschaft und Erziehung in Pestalozzis Roman "Lienhard und Gertrud", 1971, Weinheim, S. x-xii. S. Springer ; Neue Perspektiven der Pestalozzi-Forschung (in : Pädagogische Rundschau, Heft 1, 1989), S. 104.
- (13) Vgl. S. Springer ; a. a. O., S. 102—103.
- (14) P. S. W., Bd. 12, S. 39.
- (15) Ed. Spranger ; a. a. O., S. 49. 自律教育学は、ペスタロッチー教育学成立の重要な要因として評価されてきた。(森川直「ペスタロッチーにおける前期教育思想の形成」日本教育学会『教育学研究』第43巻第3号, 1976年, 参照)
- (16) H. Gudjons ; a. a. O., S. xii.
- (17) Ed. Spranger ; a. a. O., S. 47—48.
- (18) Hobsbawm ; a. a. O., S. 252.
- (19) Ebenda, S. 238—239.
- (20) Ebenda, S. 401.
- (21) マルクス著, 城塚訳『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』岩波書店, 1974年, 78ページ。
- (22) Hobsbawm ; a. a. O., S. 251.
- (23) ヘーゲル著, 藤野他訳「法の哲学」(『世界の名著35, ヘーゲル』中央公論社, 1967年), 385ページ。
- (24) 同前書, 478ページ, 383ページ。
- (25) H. Gudjons ; a. a. O., S. 265.
- (26) P. S. W., Bd. 1, S. 127.
- (27) H. Gudjons ; a. a. O., S. 85.
- (28) P. S. W., Bd. 1, S. 265.
- (29) P. S. W., Bd. 12, S. 57.
- (30) Ebenda, S. 79.
- (31) Ebenda, S. 113.

- (32) Ebenda, S. 118.
- (33) Ebenda, S. 74.
- (34) Ebenda, S. 127.
- (35) Ebenda, S. 94.
- (36) Ebenda, S. 99.
- (37) A. Rang ; Das Erbe des politischen Pestalozzi—Die politische Anthropologie der “Nachforschungen” (in : Pestalozzis Erbe—Verteidigung gegen seine Verehrer, hrsg. von J. Gruntz—Stoll, Germany, 1987), S. 43.
- (38) Vgl. K. Silber ; Pestalozzi, Heidelberg, 1957, S. 205. (前原訳『ペスタロッチー』岩波書店, 1976年)
- (39) P. S. W., Bd. 24A, S. 104—106. ラングは「個人的存在」と「集団的存在」という図式に、『探究』における人間観との直接的関連をみている。(A. Rang ; Der politische Pestalozzi, S. 135.)
- (40) A. Rang ; Der politische Pestalozzi, S. 140.
- (41) K. Silber ; a. a. O., S. 206.
- (42) P. S. W., Bd. 24A, S. 144.
- (43) P. S. W., Bd. 24A, S. 118.
- (44) P. S. W., Bd. 1, S. 235.
- (45) K. Silber ; a. a. O., S. 210.
- (46) P. S. W., Bd. 1, S. 48., S. 281.
- (47) Pestalozzi ; Sämtliche Briefe, hrsg. vom Pestalozzianum und von der Zentralbibliothek in Zürich, Orell Füssli, 1949, Bd. 3, S. 96.
- (48) P. S. W., Bd. 24A, S. 16.
- (49) J. H. Pestalozzi ; Auswahl aus seinen Schriften, hrsg. und kommentiert von A. Brühlmeier, Bern und Stuttgart, 1979, Bd. 2, S. 125.
- (50) H. Gudjons ; a. a. O., S. 264.
- (51) P. S. W., Bd. 13, S. 341—342.
- (52) P. S. W., Bd. 26, S. 60.
- (53) P. S. W., Bd. 24A, S. 169.

- (54) A. Rang ; Das Erbe des politischen Pestalozzi, S. 42.
- (55) Ebenda, S. 43.
- (56) Brühlmeier ; a. a. O., Bd. 2, S. 125.
- (57) A. Rang ; Der politische Pestalozzi, S. 138.
- (58) Ebenda, S. 139.
- (59) 森田伸子著『子どもの時代』新曜社, 1986年, 136ページ, 140ページ, 146ページ。
- (60) P. S. W., Bd. 26, S. 87.
- (61) Ebenda., S. 75.
- (62) Schweizer Lexikon, Zürich, 1945-1948, Bd. III, S. 627.
- (63) たとえばバダンテールは, 1780年当時のパリにおいて, パリに生まれる21,000人の子どものうち, 母親に育てられるものは1,000人にすぎないという事実を示しながら, 母性愛という概念も実態も18世紀には存在していなかったことを資料的に実証している。(E. Badinter ; L'amour en plus, Paris, 1980, S. 7. 鈴木訳『プラス・ラブ』サンリオ, 1981年)
- (64) ルソー著, 今野訳『エミール 上』岩波書店, 1962年, 379ページ。またバダンテール, ショーターらは, 母性観の転換期を, ルソーの『エミール』の出版前後にみている。(E. Badinter ; a. a. O., S. 42. ショーター著, 田中他訳『近代家族の形成』昭和堂, 1987年, 191ページ。) なお『エミール』の出版は, 1762年。
- (65) Vgl. E. Badinter ; a. a. O., S. 42, 172-173.
- (66) マックス・ヴェーバー著, 大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店, 1988年, 153ページ。
- (67) P. S. W., Bd. 26, S. 176. また, 拙論「スイスにおける資本主義の発展とペスタロッチー教育学の成立」(東北大学教育学部『研究年報』第37号, 1989年) 11-12ページ。
- (68) 水田珠枝著『女性解放思想の歩み』岩波書店, 32ページ。
- (69) 小川正通著『世界の幼児教育』明治図書, 1966年, 51-61ページ, 82-83ページ。
- (70) S. Springer ; a. a. O., S. 108.